

共に生きる

東日本大震災現地支援ニュース No24

2014年6月25日 大会執事活動委員会

*のぞみセンター活動報告

2014年6月

のぞみセンタースタッフ

浜田唯



「夜こわくて眠れなくなることがあるんです…」涙を目にためながらこちらを見上げる小学2年生の女の子は、ぎゅっと唇を噛みしめ言った。「どんな夢を見るの？」その質問によって開かれるかも知れない深い傷が、主によって癒されるよう祈りつつ彼女の目線に合わせてしゃがみこむ。「こわくて言えません。」涙が一つと、淡いピンク色の頬を伝うと同時に彼女の痛みがズキズキと伝わって来た。「そっかあ… すごく怖かったんだね。つらかったね…」黙って頷く彼女に掛ける言葉を下さいと主に求めた。「起きたときは、はあ～夢だったのかって安心した?」「うん。」「その怖い夢はね、もしかするとときどき戻って来るかも知れないね。でもね、必ず終わるから。何度怖いことや悲しいことがやって来てもね、イエスさまは絶対にIちゃんを1人にしないからね。命がけでIちゃんを愛してる神様がね、どんなときでもずーっとそばに居てくれるんだよ。そして必ず乗り越える力をくださるよ。」「ねえ、ゆいちゃん・・・あのときわたしを津波から助けてくれたのもイエスさまだったのかな?」「Iちゃんはどう思う?」「イエスさまだったと思う。」「そうだね。私もそう信じてる。」そう言って抱きしめた彼女の顔にはいつも通りの屈託のない笑顔が戻っていた。主は生きておられる!そう感じる瞬間が、こんな風に毎日すぐ近くできらめいている。

「家に認知症の母がいるんですが、そちらのカフェに連れて行っても迷惑でないですか。同じ話を何度もするので、あまり出歩く先がなくて。」仮設住宅から1本のお電話を頂いた。「大歓迎です!何もご心配なさらずに気軽～な気持ちでいらしてください。」お嬢さんに連れられてテーブルに座られたおばあさんは、とてもお上品でお美しい。後で彼女のひ孫さんは、去年からのぞみセンターの英会話に来ているあのカワイイ姉弟だと知った。ホ～ント、神様のされることは粹だなあと惚れ惚れする。あの人も、この人も、あのときの出会いも今の会話も、すべて繋がっている。ああ～主は素晴らしい!!

多くの奉仕者(特に東京恩寵教会の林姉や田中姉、仙台在住の芸術家・佐藤貴子さん)のお力添えにより絵手がみ教室も毎月行えるようになり定着して来た。「絵なんて描けねんだけどもさ、な～んか来ちゃうんだよなあ。不思議だべなあ。ここの雰囲気うんと好きなんだね。家に居ると、ろくなこと考えねえべ?だけどここさ来っとう胸がすーっと落ち着くんだ。」そう語るこのご近所さんも、津波にのまれ命からがら助かった。そんな彼女の笑顔が素敵すぎてスタッフまでもが勇気を頂いている。皆さまからのご支援を心から感謝し、主を仰ぎみ礼拝しつつ♡

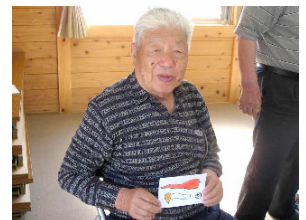
祈禱課題

- 4月からセンターのスタッフとなられた菅原智子さんのために
- 夏に3回行われる子どもキャンプが用いられ祝福されるように
- おひとり暮らしの方の健康が守られ心が癒されるように

福島県相馬郡新地町・雁小屋仮設での「絵手紙教室」報告

5月16日(13:00~15:00)

当日は同盟相馬教会の後藤一子宣教師、葛西牧師ご夫妻に加えて、東京恩寵教会から鬼澤姉が



奉仕の為に東京から駆け付けて下さり、心強い限りでした。今回は仙台在住の画家・佐藤貴子さんをお招きして絵手紙教室を開きました。仮設からは9名の参加者がありました。4月からの「のぞみセンター」のイベントに参加下さった方が今回も来られ、参加メンバーが固定しつつあり、その上、新たに来られる方が回を重ねる毎に増えています。皆さん、野菜や草花を見ながらはぎに下書きし、丁寧に色付けをされていました。その間、皆無言で集中してやっておられました。其のお顔は童心に返ったように楽しそうでした。後半はお茶とケーキを頂きながら、お互いに描いて絵を見せ合いました。とてもお上手な出来ばえにスタッフ一同感心しました。あっという間に時間が経ち、6月の再会を約束して仮設を後にしました。次回は6月27日に同じ仮設でイベントを行います。小さな一歩ですが、少しずつ仮設の方々との関係作りが出来つつあります。とても感謝なことです。 (のぞみセンタースタッフ大野雅良)

* 陸前高田活動報告

チーム陸前高田 代表 李 根培

1. 4月21日:「ムジーク・ドウ・ラ・メール (海の音楽)」と共に



4月20日は栄光教会でもイースター記念礼拝を捧げました。21日は復活の主を仰ぎつつ、「海の音楽チーム」と共に陸前高田訪問です。この会は音楽を愛する5名のメンバーが集り結成し、10周年を迎えようとしております。フランス語で「海の音楽」という意味です。海はおかあさん。母の歌声で皆さんが温かい気持ちになれるといいなあ………という思いで活動をしています。保育所や幼稚園で子どもたちと共に歌ってきた経験を活かして「子育てサロン」で、ママと子

どもたちに童謡を発信する活動をしてきました。この会の東海林育子さんは栄光教会の韓国語講座に通う生徒さんです。東海林さんは他2名を伴い、私たちと共に陸前高田市米崎保育園を訪問してくださいました。ここには100名の園児たち、24名の保母さん方がおられます。海の音楽チームの皆さん、そして仙台からの10名が広い講堂に案内されました。園児たちが、キシャポッポの曲に合わせて入場です。全員集合です。演出の小道具を用いて3名の海の音楽チームの皆さんの指導で歌います。曲に合わせて、おしりを振り振り歌う園児もいます。大人も園児もみんな楽しそうに歌います。帰りには園児たちが一列に並び、仙台からの訪問者とタッチしてお別れしました。

2. 5月5日(祝) お花見: 室根高原・アストロ・ロマンでバーベキュー



食前のお祈りがなされ、全員心を天に向けました。5つのバーベキュー台を囲み、いよいよ開始です。片地家仮設から参加した坂井勝文さんは震災前には中華料理店の経営者でした。5つの台は勝文さんの指導で、油を敷き、野菜を盛り上げその上に肉が乗せられていきます。焼く人、食べる人、「美味しいやわらかな牛肉」、「ホタテもある」、「エビもある」野菜もエリンギも……「うーん うまい」、「おいしいね……」……大好評です。炊きあがった熱々のご飯も皿に盛って大盛況です。……42名全員満腹、それでも食材が

余るほどでした。去る3月7日、8日「秋保温泉一泊・新垣勉コンサート」に参加した方々の多くが今日のバーベキューにも参加してくださいました。学生の牛島順恵さんと共に、東京恩寵教会から参加して下さった福井召一長老は片地家仮設の方々とは親しく会話をされています。仙台教会、栄光教会からの参加者も仮設の方々とは膝を交えて食べています。主の教会から派遣されて、大きな悲しみ、苦しみを内に秘めておられる仮設の方々とは親しい会話がなされ、交わりがなされております。この交わりの中にお姿は見えませんが、復活の主が共にいて、無言の聴き手となっておられます。

*名古屋岩の上教会東日本大震災ディアコニア支援室 報告

「フクシマの被災者の 特別の苦しみ に連帯して」

(ソウル カベナントチャペル日本人教会 石川和宏・元横浜教会長老)

名古屋岩の上教会のディアコニア支援室から声を掛けて頂き、何度か被災地支援に同行（今年3月と5月）させて頂いている者です。特に原発被災者の支援に絞って、「実際」と「今後」を「虫の目と鳥の目」で報告いたします。

今年、相馬市と南相馬市の仮設住宅（北飯淵・小池長沼・柚木・大野台第8）で、庖丁研ぎをしました（写真）。今年2回で約100本、どこも時間内に終わらないほどの盛況で、別の仮設住宅からも注文がありました（新道具を整え、次回以降の大量受注に備えています）。刈込バサミやナタも来ます。放射能で住めない自宅にある先祖伝来の樹木を、一時帰宅の時に剪定するのに使う道具だそうです。再訪する仮設住宅では、「たくあんが薄く切れた」「トマトが上手く切れた」とリピーターもあり、また口コミありで、注文が増えています。



研ぐのは屋外です。集会所内のイベントには二の足を踏む方でも、立ち話ができ、砥石の回りが輪になることもあります。お互いに、見つめ合うことはなく、砥石と庖丁を見ながらです。「コンサートが終わるまでには研ぎ上げますので、中にどうぞ」というお誘いも聞いてくださいますので、被災者と支援のイベントのつなぎ役にもなっています。

さて、庖丁片手に被災者の皆さんから聞いた話を少しだけ報告いたします。「飲み水はいいがお風呂がなー」。水道の水源（相馬市の場合真野ダム）が汚染されましたから、被災者の方々は水道水を飲みません。原発被災者の住む仮設住宅では、飲み水に未だ未だ強い要望があります。飲み水はもらえるが風呂の水まではダメ、セシウム風呂に入らざるを得ない、そういう意味です。風呂好きの日本人、特に中高年の方々にとってお風呂は憩いの場、それが被曝を恐れる場になっています。「県内の農業用ダム・ため池 3730カ所のうち 1940カ所で放射性物質検査を行った。その結果、会津地方を除く中通りと浜通りの558カ所の底土から、1キロ当たり 8000ベクレル超の放射性セシウムが検出された。」(2014. 3. 22 福島民報)。「環境省によると、木戸ダム（楡葉町などの水道水源）の底土には1キロ当たり 1万 6800ベクレルの放射性セシウムが滞留している（2014. 6. 12 毎日新聞）。「政府や役場は、上澄みは大丈夫だと言うが…」という被災者の気持ちは当然だと思います。

「ネズミやモグラ、野生化した豚・イノブタ・イノシシが、何でも喰ってしまう。種を蒔いても掘り起こす。農業は無理だ」「除染して家に戻っても子供や孫は寄りつかないだろう」「(除染して)戻れると言われても、店もなければ病院もない」「除染してしばらくすると数値は戻ってしまう。前より高くなることもある」。どれもその通りで、「お先真っ暗」を意味します。キリスト者がそのような方々に寄り添うニーズは、時間軸とは無関係に続いてあるのです。原発被災者の自殺・孤独死が増えていることもその証左です。

私が原発被災者支援を始めたのは、2011年3月の原発が爆発した直後、「広野町などで避難出来ないでいる人に餓死者が出ている」と聞いた時からです。3月26日に手製のおにぎりやカップラーメンを車に積んで、20km圏まで行き、戸別に声を掛けてきました。警察のパトカーに止められたのですが、事情を話し積み荷を見せ、「自己責任で」通してもらいました。その後も何度かこの地区には出向きましたが、原発北側（相馬市・南相馬市）は、「忘れられている」という問題があります。「政治が意図的にフクシマを報道させない、忘れさせようとしている」のも、実態として首肯できます。しかも原発北側は、首都圏からは遠いのです。拙宅（横浜市）から南側支援で往復約 600km、北側では同 1000kmになります。しかも除染中の飯舘村を通過しなければなりません。他と比較しボランティアが極めて少ない理由です。

改革派教会には、原発北側に、のぞみセンターが備えられています。車で30分も走ると被災者の仮設住宅です。主の御心＝ディアコニアの拠点として、特に原発被災者のためにおおいに用いられることを願っています。これからも連帯します。

* 東仙台教会ボランティアセンター報告 「山中雄一郎協力牧師就任！」

東仙台教会 立石 彰

6月15日(日)に山中雄一郎教師の東仙台教会協力牧師就職式が祝福のうちに行了されました！

そもそも2011年8月の東北中会臨時会で可決された『東北中会復興計画』に、「東仙台教会とボランティアセンターにおいて求められている働きに関して、協力伝道者を長期に亘り派遣する」という内容があり、その年の10月に行われた定期大会では「協力伝道者派遣のための資金積立」が組み込まれた『第二期募金の予算案』が決議されました。

当初は、これほど長期的な活動になるとは想像できませんでしたので、この「派遣」の実現は難しいだろうと考えていました。また、実際に長期に亘って東仙台に来てくれるような教師も現れないだろうという思いもありました。しかし、あれから三年三か月が過ぎた今、山中雄一郎先生と奥様の二三子姉がこの教会に派遣されたことは、私自身にとっても、教会の方々にとっても、本当に大きな慰めです。先生の説教を通して主イエスの御声を聴き、新しい力と喜びに押し出され、今の自分に与えられている働きに全力を尽くしたいと願っています。

この派遣のために祈り続けてくださった皆様、貴い献金をしてくださった皆様、これまで私たちを支え続けてくださっている大会執事活動委員会の皆様、そして震災直後には山中恵一教師を派遣し、今こうして山中雄一郎教師を送り出してくださった板宿教会の皆様、心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



<今月の御言葉>

「今日の答え」

札幌伝道所 貫洞賢次

あくまでも忍耐し、あきらめずに祈り続けなければならない。確かに、これが聖書の教える祈りの姿勢です。しかし、今日は答えを見ることがなくても祈り、将来に答えを待ち望んで忍耐することだけが教えられているのでしょうか。

「わたしの魂は恐れおののいています。いつまでなのでしょう。」(詩編6:4)「いつまで、主よ、わたしを忘れておられるのか。・・・いつまで、わたしの魂は思い煩い、日々の嘆きが心を去らないのか。」(詩編13:2~4)神への祈りを知っている人々は、心を注ぎだして祈りました。そして、彼らが、今日与えられた答えは、これです。「主はわたしの嘆きを聞き、主はわたしの祈りを受け入れてくださる。」(詩編6:10)、「あなたの慈しみに依り頼みます。」(詩編13:6)ほんとうに主をほめたたえて、信頼することができたなら、祈り続ける人々は、今日の答えを得たのです。

「どのようなときも、わたしは主をたたえ、わたしの口は絶えることなく賛美を歌う。」

(詩編34:2)